

【「上げ汐」の解説】

恐らく、明治中期に書かれた唄だろうから、現代語訳は要らないと思う。従って、解説のみを記すこととしよう。

この曲は「本調子」で始まり、「東西 写し絵・・・」の箇所から「二上り」に転調する。

流派や唄う場所柄により多少、歌詞に変化がある。例えば、

「江戸三景の内、^{えど}兩國は川開きのていとござい」となったり、

「日本は三景の内、奥州は松島のていとござい」などである。

夏の風物詩は、隅田川の夕涼みであろう。

「^よ勢いを競う」とは、余威（余るほどの勢い）のことでもあり、

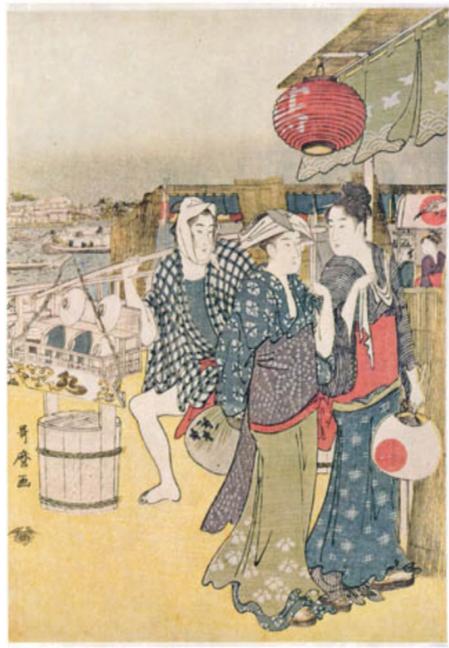
「^あ勝負いを競う」とも唄う。

両国橋の東西には「見世物小屋」が建ったり、隅田川には多くの納涼船が出ていた。その客を指して「うろうろ舟」が物を売りつけるために、ウロウロと漕ぎ回って商売をするわけである。

そうした賑わいの中で、川上に玉屋一郎兵衛、川下に鍵屋弥兵衛の花火が上がる。

野師は、

「古今東西、写し絵ってのは、ガラスに描いた絵を^{ろうそく}蠟燭の灯でもって透かし出して向こうの壁に映すのさ。明かり先の芸当ってわけだから、手元が狂えば映した絵も揺れちゃって、まだるこいかも知れませんがね。まあ、勘弁してよネ。」と口上を言う。



筆者の子供の頃は「^{げんとうき}幻灯機」と云うおもちゃがあって、セロハン紙に描いた色絵を豆電球の明かりで映す、プロジェクターのようなものがあった。「写し絵」は、蠟燭で投影していたのだろう。

ガラス絵に描かれた内容に合わせて「^{こわいろづか}声色遣い」の芸を披露していたのかも知れない。

「上げ潮」（上げ汐）は、満ちてくる潮であり、物事が盛んになる調子の良い様を云う。弾き唄いの芸者さんが、お座敷の雰囲気を感じ上げてくれる唄である。「トン子姐さん、一席頼むヨ」

昨夜は、ほぼ満月の月食だった。上げ汐になるだろうか。明日は酉の市。浅草は賑わうことだろう。

少し足を伸ばせば向島。諸兄はこの座敷のご最前だろうか。

「千代田」え、「^{せんすい}千穂」？ 「きよし」この夜「月笛」「すみ多」隅田の「波むら」「ふ多葉」の船は、「入り舟」着いて、娘「道成寺」と来ると「櫻茶ヤ」か。モー、勝手に行ってちようだい！

令和三年十一月二十日

大中臣正比呂 記